

詩篇42篇1-5節 「落ち込んでいる時」

1A 生ける神の慕い求め 1-2

1B 人間に与えられている渇き

2B 十字架が満たす霊的必要

2A 孤独との闘い 3-4

3A 絶望から希望へ 5

本文

今朝は、交読文で読みました詩篇 42 篇の、最初の五節に注目したいと思います。午後礼拝においては、42 篇から 45 篇までの一節ずつの通読です。私たちは前回、病に対して心を留める者は幸いであるという内容を見ました。病など、身動きが取れない時に襲ってくるのが「鬱」であります。気落ち、あるいは落ち込みであります。自分がこれまでやって来たことが、一切、自分では管理できない、自分ではどうしようもできないと思った時に、絶望感に襲われます。今朝は、落胆や落ち込み、または鬱について取り扱っていきたいと思います。ここ 42 篇と 43 篇では、繰り返されている言葉があります。5 節ですね、「わがたましいよ。なぜ、お前は絶望しているのか。」現代の言い方に変えると、「なぜ、お前は鬱になっているのか。」であります。

1A 生ける神の慕い求め 1-2

1B 人間に与えられている渇き

42:1 鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。42:2 私のたましいは、神を、生ける神を求めて渇いています。いつ、私は行って、神の御前に出ましようか。

私たちは、落ち込みや鬱について、世の中では「上手に付き合わないといけない」というアドバイスや知恵をもらいます。けれども聖書によると、それは祝福に変わりさえするものです。この前も学びましたように、苦しむ人は、苦しむからこそ神の慰めをもって人を慰めることができます。そして、今ここで著者が言っているように、主への飢え渇きへと変えられます。落ち込みの中で、主なる神と秘めたところの、一対一の関係を深めることができます。私たちは神の家族として、共に交わることはとても大切です。けれども、独りになって主に対面することができなければ、それは大きな問題があります。もし主に振り向くなら、すばらしいものに変わります。また、「慕いあえぐ」とありますが、この深い関係への探求も、落胆しているからこそ出てくるのです。

ここで著者が、持ち出している比喻は、谷川の流れを慕いあえぐ鹿です。私たち日本人は、イスラエルとその周辺地域にある「渇き」について想像するのが難しいです。なぜなら、日本ほど水が豊富な国はほとんどないからです。イスラエルでは、数多く「涸れ川(ワジ)」というものがあります。

荒野において、所々に緑の残っている道のようなものが見えますが、ひとたび雨が降ったときに水が流れていく川です。そういうところでは水源が見つかりやすく、旅人はワジを歩いていました。この詩篇の言葉を読んだり、歌ったりする時に、緑豊かな水の豊富なところで悠長に水を飲んでいる姿を思い浮かべますが、水溜めがあるのか、地下水が湧いていないか捜し回っている鹿の姿であり、切羽詰まっているのです。

私たちには想像が難しいですが、けれども私たちの現代社会には、神ではないもので霊的な渴きをいやそうとする代替物で蔓延しているために、どこに満たしを得られるかを知らないで、何かやる気を出させるものを求めてさまよっていています。しばしば「東京砂漠」と呼ばれますが、確かに現代社会は物理的な水は豊富であったとしても、霊的な水は枯渇している砂漠です。

ところで世において、私たちはいつも「普通の人」にならなければいけないような圧力を受けます。社会的に周辺に追いやられることを極度に嫌います。けれども、イエス様は、天の御国は、心の貧しい者のためであり、悲しんでいる者のためであると言われました。また、医者が必要なのは病人であると言われました。私たちは、自分にとっては負い目だと感じているものが、むしろ霊的な水、生ける水に近づいています。

エペソ書 5 章 18 節に、興味深い言葉があります。「また、酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。(エペソ 5:18)」酒に酔ってはならないという戒めと、御霊に満たされなさいという命令をパウロは並べて書いています。正反対の行為であり、酩酊はもちろん肉の働きです。しかし、並べているのは近いものを求めているからです。お酒はストレスを発散させるため、辛いことを癒すために飲みます。そして、少しでも思い煩いがアルコールによって麻痺されて、自分の思考をアルコールに明け渡すこととなります。神の御霊に満たされることも、似ているのです。私たちは御霊に満たされることによって、ストレスから解放されます。そして、神の思いに満たされて、自分ではなく神が支配して下さいます。似ているので、並べられているのです。心の貧しさや悩み、悲しみの隣には、神のすばらしい福音が待っています。

サマリヤの女について思い出してみましょう。イエス様は、ガリラヤからユダヤ地方に行かれる時に、サマリヤを通っていきました。そこにあったヤコブの掘ったとされる井戸がありました。そこに正午辺りに一人の女が水汲みに来ました。イエス様は、「わたしに水を飲ませてください。」と言われました。サマリヤの女は、ユダヤ人の男に話しかけられたので怪訝な顔をしていました。けれどもイエス様は、「あなたはわたしが誰であるかを知れば、あなたからわたしに、生ける水を求めたことでしょう。」と言われました。女は驚きました。「あなたは汲む物を持っておらず、その生ける水をどこから手に入れるのですか。」と言いました。

そこでイエス様が言われました。「この水を飲む者はだれでも、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしの与える水は、その人のうちで

泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。(ヨハネ 4:13-14) イエス様の語られていたのは、その井戸の水ではありません。霊の水、霊的な命のことです。女はそれでも、「そんな水があるなら、私に下さい。」と言って、イエス様が何か自然に湧き出てくる魔法瓶でも持っておられるのかのように話します。

イエス様は話題を変えられました。「あなたの夫を連れて来なさい。」女は、「夫はいません。」と答えました。イエス様は、「確かにそのとおりだ、あなたには夫が五人いたが、今あなたといっしょにいるのは、夫ではないからです。」そこで女がはっきりと、その生ける水というのが、神への渇きであると知ったのです。パスカルは、「人の心の中には、神が作った空洞がある。その空洞は創造者である神以外のものよっては埋めることができない。」と言いました。けれども、その空洞を神以外の他のもので埋めようとしていました。女は、一人の男と付き合い、そこで満たされようとしていましたが、満たされません。それで次々と男を変え、今や結婚にさえ嫌気が指し、同棲状態なのです。そしてこの女は、昼下がりの時間ではなく、他の女たちを避けて一人で正午辺りに水を汲みに来たのです。女性たちにとってはこの女は、近寄りたくない人です。しかし、神にとっては霊的飢え渇きを持っている一人の魂なのです。

この女と同じように、私たちが神以外の何かでそれを埋めようとしていないでしょうか？自分の趣味、学問、業績、キャリア、あるいは宗教にさえ活路を見出すかもしれません。キリスト教会の活動にいそしんでいれば、私は満たされるかもしれないと思っているけれども、何か喜びがないということはないでしょうか。これらを求めれば求めるほど、心が飢えてきます。なぜなら、霊的な渇きは神しか埋められず、それはイエス・キリストとの人格的關係からしか得られないからです。

2B 十字架が満たす霊的必要

私たちは、詩篇 31 篇の学びで学びました。罪を犯して、それを隠していると心が渇いてくる、骨々が干からびたようになり、日照りの中にあるような形になるということでした。そして、ダビデが罪を言い表すと、主が豊かな憐れみを施してくださり、彼は救いの喜びで満たされます。罪はこのように渇きをもたらします。神から引き離されているからです。しかし、イエス様が罪を私たちの代わりに引き取られました。十字架の上で受け取られました。そこでイエス様は、「わたしは渇く。」と言われました。罪によって引き起こされた渇きです。それを受けてくださったので、私たちは罪の赦しを受け、それで命の水が内から溢れる喜びにあずかることができるのです。

2A 孤独との闘い 3-4

42:3 私の涙は、昼も夜も、私の食べ物でした。人が一日中「おまえの神はどこにいるのか。」と私に言う間。42:4 私はあの事などを思い起こし、御前に私の心を注ぎ出しています。私がああ群れといっしょに行き巡り、喜びと感謝の声をあげて、祭りを祝う群集とともに神の家へとゆっくり歩いて行ったことなどを。

今、著者は神の家のことを思い出しています。エルサレムにある神殿のことです。そこに戻れない状況があります。ダビデがそうでしたね。サウルから追われて逃げていて、エルサレムどころかイスラエル領土内にいるのも危険でした。息子アブシャロムがクーデターを起こした時もそうでした。そしてバビロン捕囚によって祖国を離れたユダの民も同じでした。彼らは、「神などいない」という環境の中において、神の民と共に主を賛美した時のことを思い出しているのです。

その周囲の人々が、何をもって「お前の神はどこにいるのか。」と見下しているのでしょうか？彼らは、目に見える神々を拝んでいるからです。木や石で造られた神々、金や銀で造られた神々を拝んでいました。しかし、イスラエル人のあがめる神は目で認めることができません。そして彼らは、いま惨めな状況の中にいます。だから、「神を信じて、何の徳になるのか。」と嘲笑っているのです。私たちの周りの環境もそうではないでしょうか？私たちがこの社会で、いわゆる常識的に動いていけば、必ず教会には来ない、そして神は信じない、という方向に進んでいきます。神を信じて、何になるのかというのが社会の隅々にまで行き渡っている考えだからです。

それで私たちは非常にがっかり来ます。キリスト者としての信仰と、この世で生きていく中での狭間で苦しみます。あたかも神はいないとする人々と社会制度の中で、この魂も意気消沈するのです。その中で考えていただきたいのは、「では、彼らの拠り頼んでいるものはどうなのか？」ということです。詩篇 115 篇 2-8 節に、この議論があります。「なぜ、国々は言うのか。「彼らの神は、いったいどこにいるのか。」と。私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる。彼らの偶像は銀や金で、人の手のわざである。口があっても語れず、目があっても見えない。耳があっても聞こえず、鼻があってもかげない。手があってもさわれず、足があっても歩けない。のどがあっても声をたてることもできない。これを造る者も、これに信頼する者もみな、これと同じである。」彼らは、お前の神はどこにいるのか？というが、私たちは、「天におられる」と答えることができます。

そして彼らの拠り頼んでいる偶像が、いかに頼りないものであるか、口があっても語ることはできないし、耳があっても聞くことはできない、目があっても見ることはできないのです。神はどこにいるのかと言っている人々が、拠り頼んでいる目に見えるものが、如何に頼りにならないのかを私たちが知れば、それらものを妬んだり、拠り頼もうという誘惑から免れることができます。

3A 絶望から希望へ 5

42:5 わがたましいよ。なぜ、おまえは絶望しているのか。御前で思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。御顔の救いを。

絶望あるいは鬱に対する処方箋です。まず、「わがたましいよ。」と問いかけていることです。自分自身に対して語りかけていることです。自分の魂に語りかけることは、言い換えると自分の心を見張っているということでもあります。絶望している時、鬱になっている時に、私たちは、自分の心の

栓を抜いたままにしている、思いの中に出てくることを放置したまま、ほったらかしにしていることです。「どうせ、自分はだめなのだ。」「神は私に悪いことを計画しておられる。」というように、自分の思いによぎる事柄を、そのまま心で流れていくままにしているのです。それを堰き止めなければいけません。それに効果的なのは、「おまえ、たましいよ、しっかりしろ。何を、心を乱しているのだ。お前は神の前にいるのだぞ。神に希望を置くべきだ。」と語りかけることができるのです。

そして最後に絶望に対する解決策は、ここにあるように「神を待ち望む」こと、あるいは神に希望を置くことです。私たちは、神ではないものに希望を置く、期待を置いている時に失望します。その欠けた姿を見て、がっかりします。けれども、私たちは人々に希望を置いてはなりません。神に希望を置き、そして神にあって人々を見ていきます。

私たちにある、鬱に罹ってしまう根本の原因は、「自分でできる」という希望を持ってしまうことです。これまで努力して改善に向けて行ってきたことが、全くその通りにならない時にがっかりします。これまでの努力は水の泡立ったのか？と思います。自分で行ってきたことが頭打ちになる時に、失望や絶望を味わうのです。けれども、その時は神に出会う良い機会です。その時にこそ、自分ではなく神が働いてくださる始まりです。だから、著者は「私はなおも神をほめたたえる。」ということができます。自分ではなく、神が行ってくださいます。

けれども、私たちはどうしても「自分がやったのだ」という理由付けをしたがります。主にしか拠り頼めなくなってそれで、主が成し遂げてくださったのに、「実はこういう状況があったから、こうなったのだ。」と言って理由を付けるのです。こうやって神に栄光を帰するのではなく、自分たちに向けてしまうので、再び神は、私たちが限界に来るところまでそのままにされるのです。そして、自分ではどうしようもないとまたなった時に、神に希望を置く行為を行って、それでまた神の救いの顔を眺めることができます。